
否定された未来

sutadast

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

否定された未来

【Nコード】

N4669S

【作者名】

s u t a d a s t

【あらすじ】

存在しなかった幼馴染

二度目の誘拐

隠蔽された事件

過去と未来が交差する時

本来あった世界は否定され

本来なかった世界が始まる

この小説は初心者作家が書いた小説です
温かい目で読んでください

終わりの始まり（前書き）

初心者ですが温かい目で読んでください

終わりの始まり

ここはどこだ？

俺は藍越学園を受験しようとした

その会場で道に迷って

その後は何も覚えていない

それにしても暗い

真っ暗だ

そういえば小さいころにも同じことがあったな

俺が弱いばかりに

千冬姉に迷惑を掛けちゃったな

また俺は迷惑を掛けるのか

千冬姉に

俺はずっとこの暗い場所に居続けるのか

いやだ

俺は決めたんだ

千冬姉の迷惑にならないと

千冬姉を助けると

俺は――――

翌日、織斑一夏の搜索願が出された

そして、四月を迎えた

春の冬（前書き）

初めに、すいません

この作品にオリキャラとオリISを出さないと続けていけそうに無いです

困難でも良い方は続きを読んでもください
よろしく願います

ちなみにしばらくは出ません

春の冬

『IS学園』

あれから二週間

一夏は見つかっていない

一夏が心配で夜も寝れない

しかし、今は仕事に集中することにした

「私がこのクラスの担任の織斑千冬だ」

きゃーきゃーとうるさい連中だ

「半年で基礎知識を覚え、残りの半年に実践練習を行う」

目の前が少しふらつくが気には居られない

「織斑先生、大丈夫ですか？」

こいつは、私の後輩で同じクラスの副担任を務めている山田麻耶だ

ちなみに、逆から読んでもヤマダマヤと呼べる

「大丈夫だ」

私はまだ倒れる訳にはいかない

『???』

何も見えない

何も聞こえない

この暗闇に何日居るのだろうか？

何も見えないはずなのにそこにあるものは分かる

何も聞こえないのに人が居ることが分かる

俺はここで何をしたいのだろうか？

『I S 学園・職員室』

電話が鳴った

束からだ

「私だ」

「ちーちゃん、いっくんの居場所が分かったよ」

「本当か」

思わず叫んでしまった

「本当だよ」

「何処だ？」

「いっくんのうけるはずだった受験会場」

「一夏は無事か？」

「無事っちゃん無事だね」

安心した

「今からそっちに行く」

「待ってるよー」

私は急いで束のところに向かった

『市民アリーナ』

「ちーちゃん、こっちだよ」

「わかってる」

「いっくんは無事だよ」

「そうか」

「私はもう行くね」

「世話になったな」

「いいよ、ちーちゃんといっくんのためだもん」

束はどこか寂しそうに去っていた

私も帰るか

「本当に無事でよかった」

私は一夏をつれて家に帰った

春の冬（後書き）

誤字脱字等があれば教えてください
意見・感想なども募集します

白の目覚め（前書き）

まずは、感想などいただき有難う御座います
これから頑張っていこうと思います

白の目覚め

全てが解決した

千冬はそう思った

しかし全ては始まりに過ぎなかった

『織斑家 リビング』

私はまた一夏を危険な目にあわせてしまった

その目には自分の無力さを語っていた

「千冬姉・・・」

「一夏!？」

『??:??:?』

真っ暗で何も見えない

しかし、目の前に何かがあるのがはっきりと分かる
なぜならば

【そこだけ白く光っているから】

それはまるで

【誰かを待っているようだった】

『織斑家 リビング』

眩しい

「一夏!？」

あれ？千冬姉がいる？

俺は受験会場に向かって

それから・・・

覚えていない

「何があったか覚えているか？」

「まったく覚えてない」

「そうか・・・」

「ごめん」

「誤ることは無い、無事でいてくれたんだからな」

その言葉を聞くと胸苦しい

俺は千冬姉に守られてばかりだ

俺は力が欲しい

千冬姉を守るために――――――

『? ? ? ?
』

暗闇の中【白】は光を放っていた

その輝きはますます輝いていた

まるで

【待っていた時がきたかのように】

その輝きは光を放ち消えていった・・・

白の目覚め（後書き）

なんかよく分からない方向へ話が進んでる気がするw
感想や意見があれば下さい
よろしくお願いします

IS学園へ・・・(前書き)

更新が遅れてすみません

星架かをプレイしていたので更新してませんでした

これからも不定期更新になるかもしれませんが一週間に一回は更新
したいです

今後ともよろしく願います

IS学園へ・・・

【IS学園 一年一組】

「今日は転校生が来ました」

もしかして男でISが動かされる男の子かなと言う声が周りからは聞こえていた

「皆さんも知っての通りの男の子です」

きゃーきゃー叫ぶ声が廊下からも聞こえてる

「織斑一夏くんです」

俺はこのクラスの副担任の山田先生に呼ばれた

「どうも、織斑一夏です」

それだけ？

その視線だけでもつらい

一応は答えておくかな

「好きなことは家事全般で嫌いなことは何も出来ないことです」

俺の自己紹介が終わると周りは静かになっていた

「織斑君の目の前に開いている席が織斑君の席です」

俺は席に座ると扉が開いた

「全員、座っているな？」

この声は千冬姉の声だった

そもそも俺がIS学園に通っているか

それは時を一週間ほど前に遡らなければならない

【一週間前の織斑家 リビング】

“強くなりたい”

俺は願った

すると俺と千冬姉の前に『IS』が現れた

そのISはまるで“俺のことを待っていた”ことを示すように俺の前にあった

俺はそのISを触れた

皮膜装甲展開・・・完了

推進機正常作動・・・確認

接近ブレード・・・展開

ハイパーセンサー最適化・・・終了

始めて見たのに“始めて見た気がしない”

それだけじゃない

このISの“全てが分かる”

「一夏!？」

「大丈夫だよ千冬姉」

「本当だな」

「本当だよ」

こうして俺はISに乗れてしまったのでこのIS学園に入学をした

もう一人の幼馴染（前書き）

更新が遅れてすみません

不定期投稿にならないように努力します

もう一人の幼馴染

IS学園

この学園にもクラス委員は存在する

「ちょっとよろしくて？」

変わった髪形をしている女の子が話かけてきた

めんどくさいので無視することにした

「人が話しかけているのに無視するなんて正気ですの？」

無視をし続けていた

「更にその相手が私イギリス代表候補生のセシリア・オルコットと分かったの態度ですか？」

代表候補生

国家代表のIS操縦者の候補生のこと

つまりエリートのことだ

「そのエリートである代表候補生が俺みたいなイレギュラーに何の用ですか？」

俺は一応返事はしておいた

「その返事の仕方は腹立たしいですが私がエリートであることはわかってるようですね？」

束さんが人に興味が無い理由が分かった気がする

「どうでもいいんだそんなこと」

「そんなこととは何ですか？」

セシリアは怒っていた

「お前のことだよ」

「何ですって!!」

「自慢話なら他所でやってくれて事だ」

「ならば決闘ですわ」

「場所はどこ？」

「一週間後、第三アリーナで勝負ですわ」

こうして休み時間は終わった

放課後

「一夏」

千冬姉だった

「どうしたの千冬姉？」

「オルコットと決闘とは本当か？」

その事か

「本当だよ」

「なぜ受けたんだ！ISには乗ったことがあっても戦闘はまだ――
――」

千冬は言葉が続けようとしたが一夏の瞳が続けさせなかった

大丈夫、絶対に勝つから

一夏の瞳には絶対的な自信があった

「好きにしろ」

「ありがとう千冬姉」

「それと一夏」

「何、千冬姉？」

「今日から寮で暮らしてもらう」

「はい？」

「政府の命令だ」

「そう言うことか」

政府は俺を監視、保護をしたいようだ

「もしかして荷物は・・・」

「私が用意した」

やっぱり

「必要最低限だけ用意しておいた」

ですね

「場所は1026号室だ」

「分かったよ」

俺はしぶしぶ歩いていった

コンコン

俺はノックをした

もしかしたら風呂上りではったり会う可能性があったから

その予想は外れてなく

「ちょっと待ってて着替えるから？」

今の声に聞き覚えが・・・

「何か用かしら？」

彼女を見て俺は思わず彼女の名を口に出す

「彩夏なのか？」

「一夏・・・」

二人は再会を果たす

もう一人の幼馴染（後書き）

オリキヤラきたー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー
ー

設定等はもう少しストーリーが進んでからにします

あと更新が遅れてすいませんでした

今後ともよろしくお願いします

再開と試合（前書き）

前回、誤字があったことを教えていただいております
誤字脱字があれば気軽に教えてください
評価もよろしくお願いします

再開と試合

「彩夏なのか？」

「一夏・・・」

あの黒髪のロングヘアーにあの赤い瞳

彼女は間違いなく俺のファースト幼馴染の「星野 彩夏」だった

「会いたかったよ一夏くくく」

彩夏はいきなり抱きついた

「おい彩夏、戸々じゃ皆に見られる」

「別にいいじゃない」

いや、全然良くないんだけど

「彩夏、お願いだから先に部屋に入れてくれないか？」

「一夏のお願いだから聞いてあげる」

なんとか部屋に入れてもらった

「そう言えば彩夏は何組なんだ？」

「一夏と同じ一組だよ」

「でも、今日は教室に居なかったよな？」

「ISを取りに行ってたのよ」

「て、ことは・・・」

「私は代表候補生よ」

彩夏も代表候補生だった

「いつ、代表候補生になってたんだ？」

俺は思ったことをそのまま言った

幼稚園から中学卒業まで一緒の学校に通ってたのに候補生として

いつISに乗って、いつISの勉強していたのか不思議だった

「つい最近よ、まさか適正が高すぎて選ばれるなんてね」

「まだISには乗ってないのか？」

「最適化のためにちょっとは乗ったわ」

IS学園に入ってることは知ってたけど

まさか代表候補生になってるなんてな

「そろそろ寝ない？」

彩夏は眠たそうに言った

「そうだな」

俺は眠りについた

翌日――

肌と肌が接触している感覚

この部屋には俺と彩夏しか・・・

もしかしてと思って布団の中を確認する

彩夏だった

「うん？おはよう一夏」

「またか・・・」

彩夏は千冬姉の居ない日はいつも俺の布団に入っている

小3ぐらいから俺の布団にもぐり始めていた

「たまには一人で寝ろよ」

「三週間は我慢してた」

それは俺が行方不明になってこのIS学園に来るまでの日時だった

俺は彩夏にも迷惑を掛けていたんだな

「ごめん」

「一夏が悪いんじゃないよ」

彩夏は優しくそう言ってくれた

「そろそろ食堂に行こうよ」

「そうだな」

俺たちは食堂へ向かった

「ねえ一夏？」

「どうした？」

「一夏はどれにするの？」

「俺は日替わり定食にしようと思う」

「じゃあ私も」

俺たちは同じものを頼んで同じテーブルに座った

その隣に見覚えのある女の子が座った

「あれ？ 箒じゃん」

「・・・・・・・・」

無視された

「おい彩夏、箒だぞ箒」

「箒？誰だっけ？」

そうだった

彩夏は俺と千冬姉と束さんと両親以外の人間のことはすぐ忘れるんだった

そこら辺は束さんにそっくりだ

「あいつとそっくりなんてありえないよ一夏」

あ、心が読まれた

それよりも

「おい、箒」

「なんだ・・・」

「そんなに怒らなくてもいいだろう？」

「怒ってない」

「一夏？知り合い？」

「小3まで同じ学校の箒だよ、篠ノ之 箒」

「あいつの妹ね、思い出した気がする」

「本当、適當だな」

そんな会話をしてる内に箒は居なくなって手紙だけが残されていた

『今日の放課後、剣道場にて待つ 篠ノ之 箒』

紙は今のラブレターにつかわれていそうな紙なのに

中身はかなり古風だった

そして放課後

「まってたぞ一夏」

「何のようだ？」

「私と試合しろ」

いきなりそんな事を言われると思わなかった

「はい？」

「代表候補生と戦うのだろうか？ISは無理だが剣なら見てやれる」

「用はそれだけか？」

俺は心底呆れて言った

「それだけだとは何だ」

「意味がないと言ってるんだ」

そう、本当に意味がない

「なぜ、そう決め付ける」

「俺は防具無しでも箒に勝てるからだ」

「な、私を馬鹿にするなああああああああああ」

箒は凄い速さで間合いをつめてきた

それさえ意味がないのに

箒の振り下ろした竹刀は俺の人差し指で受け止めた

「そんな、馬鹿な・・・」

「だから言ったんだ“意味なんてない”て」

箒は呆然と立っている

すまない、箒

俺はそのまま部屋に戻った

考え事をしながら

どうして気配がしなかったんだろうか？

どうして抵抗できなかったんだろうか？

しかし、考えるだけ無意味に思えてきた俺は考えるのをやめた

そして、セシリアとの対決が始まろうとした

再開と試合（後書き）

一夏君つええええええええええ

俺は何を書きたいんだWWWW

これからもがんばります

それしか言うことが思いつかないです

白と蒼の戦い（前書き）

テスト勉強でなかなか更新できませんでした
迷惑をかけてすみませんでした

白と蒼の戦い

俺はどうしてあの気配に気づけなかったのだろうか？

春休みに俺が誘拐せれてしまった

俺が弱かったせいだろうか？

千冬姉は力だけが強さじゃないと言うけど

今回は力だけで負けたと思う

・・・考えても無駄だ

明日のために寝るか

明日の戦いのために

いつものことだが彩夏は俺のベットで寝ている

「起きろ、朝だぞ」

「もう少しだけ」

「ダメだ、着替えろ」

「はい」

少しは遠慮して欲しいものだ

「これよりクラス代表選を行う」

千冬姉の合図で試合が始まった

「最後のチャンスをあげましてよ」

「チャンス？」

「今、降参するなら今までの無礼を許して差し上げます」

「アハハハハハハ」

「何を笑ってますの？」

「いや、チャンスって言うからなんだろうと思ってたら」

笑いが止まんね

「バカしてますの？」

「そう怒るなよ」

「許しませんわ」

セシリアはいきなり撃ってきた

「その程度の攻撃ならかわせるぞ」

「いつまで持ちますかしら」

セシリアはどんどん撃ってくる

だが俺には当たらない

そのせいかセシリアの顔に苛立ちが見えてきた

「そろそろ別の攻撃が見たいぜ」

「お望みなら見せてあげますわ」

セシリアの機体からピットが四つ出てきた

「それが隠し球か」

「ええ、ブルーティアーズの力を見せてあげますわ」

「力ね・・・」

ブルーティアーズは俺を襲ってくる

俺もそろそろ攻撃するか

「白式、接近ブレードと片手銃を展開」

俺の支持に従い白式は武器を展開してくれた

「接近ブレードに片手銃で何をするつもりですか？」

「そろそろ遊びは終わりにするんだよ」

「織斑君はすごいですね、あれで3回目の操縦とは思えません」

「あれでも私の弟だからな」

「照れ隠しですか？」

「さて、山田くん君には後ほど稽古が必要のようだな」

「い、いえ結構です」

「なに、遠慮するな」

「え、遠慮なんてしてませんよ」

「ついでに私は身内のことでからかわれるのが嫌いだ」

「分かりましたから手を離してください」

教師のやりとりの一部である

「消えろ、ガラクタが」

地面には白い紋章が現れる

そこからは白い巨大な刀が現れる

ブルーティアーズはその刀に刺さり砕けていった
そしてセシリアにも襲いかかってくる

「なんなんですよこの攻撃は？」

攻撃が止むと一夏は片手銃で襲いかかってくる

その攻撃もただの攻撃ではなかった

球が曲がってきたのだ

「これは偏向射撃、なぜあなたが使えるのですか」

それは怒りに満ちた声だった

同時に攻撃も加えた

その攻撃をまともに受けた

しかしそれは一夏の計画通りだった

「最適化が完了しました、一次移行に移行しました」

「な、一次移行でことは初期設定だけで戦ったなんて」

「これで終わりだ」

一夏の接近ブレードの雪片三式ゆきひらさんしきと片手銃の零式黒刀ぜろしきくろう

この二つの武器による攻撃はセシリアを倒すのに十分過ぎだった

「勝者、織斑一夏」

こうして幕は降りたのです

隠蔽された過去編 1 天才と悪魔と天使の交差点（前書き）

投稿しようと思ったら寝落ちで気づいたら全て消えてまして
そのショックからやつと立ち直れました

不定期で過去編や番外編などの投稿もしていこうと思います
応援コメントもありとても嬉しいです

これからよろしくお願いします

隠蔽された過去編1 天才と悪魔と天使の交差点

これは天才の例え話

過去に一度あったお話

その例え話は天だけが聞いていた

隠蔽された過去編1 天才と悪魔の交差点

「これは天才と悪魔であったお話だよ」

むかしむかし、とあるところに

とても可愛くてウサミミの似合う天才がいました

天才はいつものように何かを作っていました

ちなみに、その発明がのちにISと呼ばれるようになるんだよ

ある日、天才はちーちゃんに会いにちーちゃんの家に行きました

ちーちゃんは天才の友達だよ

家に入った天才は鉄の臭いがしました

そこで見た景色は二つの生き物がいつくんに殺されているところでした

いつくんはちーちゃんの弟だよ

天才は生き物だつと物を踏んでいつくんに近づきました

いつくんは楽しそうでした

天才は彼を見て悪魔だと思いました

天才は悪魔に出会えてとても嬉しそうでした

いつくんはなんでそんなに嬉しそうなのと聞いてきました

天才は悪魔に出会えたからだよと答えました

いつくんはそっか…と答えました

いつくんはそのあと倒れてしまいました

その笑顔は、まるで天使のようでした

天才はいつくんを自分の家に連れていきました

馬鹿な生き物はこれを強盗殺人で肩をつけました

ちーちゃんも本当のことは知っていません

いつくんはもう忘れてしまったかもしれない

だけど天才は悪魔のような微笑みと天使のような寝顔を知っています

天才は彼に恋をしたと思いました

彼に会うたびに嬉しくなったり

彼と話すたびに楽しくなったり

彼が別の人と話してるのが面白くなかったり

彼のことを考えるだけでとても良い気持ちになっていきました

だから私はいっくんのことが好きになったんだろうと思いました

あれ？途中でいっくんのことを彼て呼んじゃってるよ

天才は私なんだよ、皆気づいてる？

ブルルブルル

電話が鳴っているね

「もしもし、天才の束ちゃんだよー」

「一夏です、束さん」

いっくんだった

嬉しい

「束て呼び捨てて欲しいな」

「またまたそう言うことを言うんですね」

「いいじゃないかいじゃないか」

「それより、面白いものを作ってるんですか？」

「秘密だよ」

「楽しみにしていますよ」

真実を知っているのは私とつくくんだだけだよ

隠蔽された過去編 1 天才と悪魔と天使の交差点（後書き）

変な例え話ですが物語上は真実です

てこんなこと書いていいのか俺w

そういうのはやめて欲しい方はコメントをくだされば止めます
自分的にはネタバレと思っていないのでへへへ；ゝ

もっと多くの方に読んでもらえるように努力させていただきます
これからもよろしく願います

三人目の幼馴染

「それでは一組の代表は織斑君になりました」

なんでこんなことになってんだっけ？

思い返してみると…

俺が推薦されて

セシリアが猛反対

さらに、日本を侮辱

それに俺がキレて決闘

それに勝利

勝利Ⅱ代表決定

あ…

「しまったあああああああああああああ」

「どうしたんですか織斑君？」

周りは驚いているが千冬姉と彩夏は驚くどころか笑いを堪えてた

何か泣けてきた

なんだかんだあつて放課後を迎えた

「一夏はすごいね」

「彩夏、お前分かってたな」

「もちろんじゃない」

なんだが悔しい

「それよりも戻らないかしら」

「そうだな」

俺たちは寮へ戻った

「どうしましたか凰さん？」

「いえ、なんでもないです」

あれは一夏よね

「噂の男子は何組みですか？」

「一組です、凰さんは二組ですので隣のクラスです」

「ちなみに一組の代表でもありますよ」

「二組の代表を教えてもらっていいですか？」

「いいですけど、どうしてですか？」

「代わってもらうんですよ」

「みんなみんな聞いてー」

声の主は秋葉さんだっけ？

「どうしたのよ美穂？」

「二組の代表が代わったんだって」

「しかも、専用機持ちで中国の候補生だって」

周りが騒がしくなったとき誰かが現れた

「そうよそれが私、凰鈴音よ」

「て、鈴かよ…」

「なによそのがっかりしたって感じ」

「別にそういうわけじゃないけどさ」

「けど何さ…」

「サード幼馴染が来て幼馴染が全員揃っちゃったからさ」

「へえ、彩夏もいるんだ」

鈴は彩夏の方に近づいた

「久しぶりね彩夏」

「…誰だっけ？」

眠たそうに答える

相変わらず興味が無い奴には冷たいな

どこかの天才みたいだ

「むむ、いっくんが私の噂をしたのを感じるよ」

さすが天才

「ねえ一夏、知らない子が話しかけてきたときはどうするべきなのかな？」

「いやいや、小4から中2まで一緒だったじゃないか」

「そんな奴もいたかしら」

「人のことぐらい覚えときなさいよ」

「興味ないわ」

「やっぱりムカツク」

「凰、早く自分の教室に戻れ」

千冬姉の名簿アッタクが炸裂した

鈴は大人しく教室へ戻った

変わりゆく未来への余兆 分岐点編（前書き）

前回の前書き忘れてたw

今回から分岐と言う設定が追加されます

不定期に分岐を行いストーリーを進めます

感想で好きなキャラ名を書いていただき

集計結果で人気の高いキャラとノーマルの二√のストーリーを書きます

投票が10も満たない場合はこちらが勝手に決めさせてもらうのであしからず

ちなみに自分はシャルロット党ではないです

あまり、偏らないようにします

ノーマルエンドは絶対書きます（・ω・）

今後もしろしくでありますよ

変わりゆく未来への余兆 分岐点編

まさか、このタイミングで鈴がこっちに来るなんてな

「織斑」

「は、はい」

今は授業中だった後で考えよう

「飛行の見本を見せろ」

「分かりました」

俺はISを展開する

一秒も掛からなかったが…

「もう少し早く展開しろ」

「は、はい」

千冬姉には怒られた

そうしてしばらくすると

「織斑、聞こえるか」

一夏の白式にエラーが出たなんて

早く助けにいかないと

「まて、星野」

私は千冬さんの静止を無視してISを展開した

「来なさい、優雅姫^{ゆうがひめ}」

「他にも専用機用がいたなんて」

周りのことなんて気にしてられない

「一夏、一夏ああああああ」

目覚めると白い天井だった

周りを見ると彩夏が寝ていた

看病してくれたんだな

これから俺はどうするか…

変わりゆく未来への余兆 分岐点編（後書き）

この後続く話が分岐ストーリーです

一つ一つにはストーリーを動かすほどの変化はありません

ですが、積み重ねるほど未知の物語ストーリーが創られていきます

自分自身でもどうなるかわかりません

応援、よろしくお願いします

変わりゆく未来への余兆 分岐1（前書き）

期末テストがあって更新できませんでした

すいません＞＜

今回から分岐が始まります

変わりゆく未来への余兆では3つに分岐します

変わりゆく未来への余兆 分岐1

俺は彩夏を起こすことにする

「彩夏、起きろー」

「もう少しだけ…」

こいつ、寝ぼけてるな

彩夏の顔は幸せで溢れていた

羨ましいかな…

「一夏…しゅきー」

「全く、こいつは」

俺は彩夏をおんぶして部屋に戻った

「あれ、ここは？」

「やっと起きたか」

「一夏？」

私が気づいたら一夏が目の前にいた

一夏のケガは？

どこも怪我してない

「一夏、ケガはどうしたの？」

「いや、俺が起きたときには治ってたぞ」

「そうなんだ、よかった…」

「そうそう、俺の看病ありがとうな」

「ふえ…」

一夏がありがとうって言ってくれた

嬉しいな

「どういたしまして」

「俺は眠いから寝るけど彩夏はまだ起きるのか？」

一夏にそう言われて時計を見ると既に23時を過ぎていた

「私も寝るわ」

「それじゃ、おやすみ」

「おやすみ」

今日は、いい夢が見れそう

変わりゆく未来への余兆 分岐1（後書き）

これで分岐1を終わります

分岐1は彩夏√です

彩夏のキャラがぶれてきてる気がするので固定しようと思います

意見など募集します

変わりゆく未来への余兆 分岐2（前書き）

二つ目の分岐です

分岐2、始まります

変わりゆく未来への余兆 分岐2

俺は…

そんな時、俺の携帯電話が…てなんで俺のケータイがあるんだよ

一旦、それは置いといて電話に出る

「もしもし?」

「いっくん、大丈夫? ちーちゃんから聞いたときは焦ったよ」直ぐにそっちに向かったんだけど、保健室の場所が分かんなくて、今はいっくんの部屋にいるんだけど私、どうすればいいのかな?」

俺は束さんの慌てぶりが分かって思ったことが…

天才も焦ったら混乱するんだ

ということだった

「落ち着いてください、今からそっちに向かうのでじっとしてください」

「うん、分かったよ」

俺は東さんのもとへ向かった

まだかな？まだかな？

いっくんまだかな？

保健室には既に行ってたけどそこにあやちゃんがいたから困っちゃた

だから、いっくんの傷だけ治して帰ろうと思ってたのに

いっくんの部屋が観たくなっちゃった

この部屋はあやちゃんの部屋でもあるんだよね

チク

チクチク

なんだろ？胸がチクチクする

チクチクチクチク

痛いよ痛いよ

なんだろう？あやちゃんに嫌がらせしたいなく

私がそう思ったときに部屋のドアが開いていっくんがあらわれた
いつの間にか胸の痛みとあやちゃんに嫌がらせしたい気持ちが無く
なっていた

その代わりに胸がドクドクしてる

「いっくん」

「うわ、束さん」

私は思いつき、いっくんにダイブしちゃった

「いっくん、いっくん、いっくん」

「束さん…」

あれ、視界がぼやけてる

おかしいな

「涙を拭いてください、束さん」

涙が流れてるんだ

「ありがとう」

ガチャ

あ、ちーちゃんだ

「何をしてるか馬鹿ども」

「またね、いっくん」

「ちょ、東さん」

「織斑…」

「…はい」

「覚悟はできてるな」

「はい」

ありがとう、いっくん

変わりゆく未来への余兆 分岐2（後書き）

分岐2は束√です

束さんの一人称が長いのは気にしないでくださいね

変わりゆく未来への余兆 分岐3（前書き）

変わりゆく未来への余兆での最後の分岐点です

先に言っておきますがこの話はノーマル√です

あと、更新が遅れてすいません

感想等お待ちしております

変わりゆく未来への余兆 分岐3

俺は・・・

次の行動を考えていると

「一夏、あんた大丈夫なの？」

鈴が入ってきた

その怒鳴り声が聞こえたのか

「全く、うるさいわね」

彩夏が起きた

「鈴、保健室では静かにしろよ」

「う、うん」

「一夏、抱きしめて」

彩夏はまだ寝ぼけてるのかよ

「ダメだ」

「えゝケチ」

「あああ、あんた自分で何言ってるのか分かってるの」

鈴が彩夏の寝言に本気で反応した

「分かってるわよ」

分かってんのかよ

「さすが一夏だわ、心の中でのノリツツコミてなかなか出来ることじゃないわ」

「人の心を読むな」

俺までムキになってどうする

「それよりさっきの言葉は本気なの」

鈴がまた話題を持ち替えした

「さっきの言葉で何かしら」

「だ、抱きしめててやつよ」

なぜか恥ずかしそうに言った

「半分本気で半分本気よ」

「結局、本気でことじゃねえか」

「そう言うことだから一夏、抱きしめて」

「だから、ダメだ」

「えゝなんでよ」

「嫌なことは嫌だ、というよりめんどくさい」

「一夏、それより約束覚えてる？」

「えっと酢豚がてやつか？」

「そうよそれよ」

「わりいな、俺は自分の作った酢豚しか食えないんだ」

「それってどう言う意味よ」

「鈴が引っ越した後に千冬姉が俺のために酢豚を作ってくれたんだが・・・」

「見た目が普通なのに食べた瞬間、腹を壊す呪いの食べ物食べて・・・」

「今度は彩夏の酢豚を食べたんだが・・・思い出したくない」

彩夏は少し不機嫌そうだった

彩夏は料理が得意なはずなのに酢豚だけまともに作れないんだよな・

この話は日を改めて話そうと思う

「なんか、ごめん」

「謝らないでくれよ、別に鈴のせいじゃないだろ」

時計を見ると既に寮に戻らないといけない時間だった

「そろそろ戻ろうか？」

「そうね」

「一夏、早く行こう」

「おう」

こうして雑談を終えて寮に戻った俺たちだが寮長の千冬姉に見つかり

グラウンド10周させられたのは言うまでもない

変わりゆく未来への余兆 分岐3（後書き）

意見などありましたら遠慮せずに教えてください

参考にさせていただきます

クラス対抗戦 前編（前書き）

いつの間にかお気に入りになってくれた人の数が減っている><

それでも頑張ります

よろしくお願いします

クラス対抗戦 前編

一夏に約束のことを聞いたときに酢豚は食べれないと言われちゃった
だから約束も意味がなくなっちゃった

だけど

諦めないわよ、一夏

「という訳で部屋を代わって」

「嫌よ」

「男とは嫌でしょ」

「一夏なら問題ないわ」

オッス、おらの名前は織斑一夏

なぜこんなことになったと言うとな…

俺が酢豚が食べれなくなったと言う話をしたら

「約束を破ったんだから責任取りなさいよ」

とのこと

そして、原因である彩夏にも責任を取れてことなんだが
なぜそれで部屋を代わることになるんだ？

「一夏と同じ部屋にいたらわざわざ回りくどいことをせずに一緒に寝れるわ」

「ななな…なんですって」

俺も驚いたがいつもしてくるから慣れてしまった

「この不潔、不純、ヘンタイ」

俺に対して怒鳴りつけて部屋を出ていった

次の日にさらにめんどくさいことが…

「ヘンタイ一夏」

「ヘンタイじゃねーよ」

「あんたを明日のクラス対抗戦で裁くから覚悟しなさい」

「俺の発言は無視かよ」

鈴は高らかに自分の教室に帰っていった

そしてクラス対抗戦の日がやって来た

白式は相変わらずだが、こいつは俺を俺と認めていない

なんとかいうか、パラレルワールド平行世界の理論で考えると

この世界の俺ではなく別の世界の俺のための機体が白式だと思う
なんでだがわからないがああの時のエラーは警告なのかもしれない

白式からの最後の警告：

それより、鈴との試合だ

「あれが、鈴の機体」

「そう、甲龍よ」

俺は一抹の不安を感じながら集中する

「今なら謝ればあんたの罪は軽くなるんじゃない」

「俺が何をしたんだよ」

「自分でも気づいてないの」

イライラしていて口がすべてしまったのだ

そう…

「さっさと始めるぞ貧乳」

と言ってしまった

「貧乳ね…言っちゃたんだ」

「あ、悪い口が滑っちゃった」

「それで、許してもらえと思ったの」

鈴の武器である青龍刀が俺に襲いかかる

「零式黒刀」

俺の武器である零式黒刀は刀に代わった

青龍刀は雪片三式で対応した

零式黒刀で鈴を攻撃するつもりだったが

嫌な予感がして離れた

離れたあとにグラウンドがへこんでいた

「衝撃砲か」

「龍咆を初見で躲すなんて流石ね」

「なぜグランドがへこんだんだ」

「衝撃砲ですわね」

「そうだ、空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃
それ自体を砲弾化して撃ち出すのが衝撃砲だ」

「それを感じただけで躲すところが一夏らしいけど」

あれは厄介だ

だったらあれを使うしか：

『警告、空間に歪みが生じています気を付けてください』

黒い光が現れそこから出てきたのは：

「フル・スキン全身装甲だと…」

「ありえないわ」

「遮断シールドLV4、しかも全部の扉が閉まっています」

「織斑先生、ここは私が「いえ、私が」」

「彩夏、お前が行け」

「わかりました」

彩夏はさっさと出ていった

「納得いきません、織斑先生」

「なにがだ？」

「なぜ私ではなく彩夏さんなんですか」

「確実にこの状況を打破できると判断したからだ」

「それにあそこには電磁場と空間の歪みが観測できる、お前がいた
ら邪魔になるだけだ」

「どうして彩夏さんは行かせたんですか」

「それは彩夏の機体の性能を知っているからだ」

クラス対抗戦 前編（後書き）

空間の歪みが発生したIS学園

その中から突如現れた全身装甲のIS

そして、彩夏の機体「優雅姫」の能力とは

次回、否定された未来

「クラス対抗戦 後半」

次回もよろしく

次回予告を作ってみました

いないと思う人はコメントよろです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4669s/>

否定された未来

2011年10月8日23時35分発行